

わたしも学園紛争ばかりの大学に学ぶつもりはなかった。いままも演劇志望の若い人はいろいろなアルバイトをやっているらしい。親の仕送りで演劇の勉強をしている人もいる。時代である。「悪い仲間には」との親の願いもあるのかもしれない。しかし、若い日に汚れて働くことを知るのも重要である。わたしは腰痛が持病である。青春時代に痛めた腰である。

昭和39年、わたしは佐世保から「西海号」で東京へ行った。関門海峡を越える夜汽車の窓に映るわたしの顔はなんとなく切な気であった。東京オリンピックの年である。5機のジェット機が空に描く五輪のマークは東

た。映画監督とは貪欲なものである。岡本喜八監督のわたしへの口癖は「めしは食ったか」であった。いま、わたしも、我が家を訪ねる若い人にはそう質問をする。人生は順繰りなのである。順送りといった方がいいか。三船敏郎さんに会ったのには

「だれ」とわたしのことを聞いていた。スタッフでもキャストでもないわたしを訝しがるのは当然である。そして、三船さんはわたしに近づくと「岡部くん、頑張れよ」とおっしゃった。映画とそっくりの声であった。心臓がパンクした。世界の三船敏郎がわたしの名前を覚えてくれたのである。

世界の三船に会う

京で見た。

監督宅ではいろいろな人に出会った。ひとつの作品が完成すると庭でパーティーである。わ

次のパーティーでも、三船さんは「あの人だれ」とわたしのことを聞いていた。わたしはスターの気配りと気まぐれさを知った。そうでなくてはスターは務まらない。まだ、わたしは小

岡本喜八監督宅には大学とアルバイトの暇を見つけてはよく遊びに行った。脚本家と岡本喜八監督の映画の打ち合わせを聞くのが楽しかった。アイデアに困ると「岡部くん、どう思うかね」とわたしにまで意見を求め



おかべ・こうだい 1979年に「肥前松浦兄妹心中」で岸田戯曲賞を、89年に「亜也子」で紀伊國屋演劇賞個人賞を受賞。日本劇作家協会元理事。松浦市で毎年、子供たちにミュージカルを指導している。川崎市在住。71歳。

林旭には会えていない。もう、会わない方がいいのかな。
(松浦市出身)